上巻抄

特別
へ12
5127
16

みこくハ　夕霧のことなり　此君とはゆゑの
ことなりつゝ給ふしてハ源氏の子なり
とは見ることをゆるしたまりきこゆるをいふ
のことわりなり

めてたりける　めりかハ感すへきりける夕霧
なり又夕霧ハ人と五之歳にてなり
侍従君　ゆゑなり夜侍従ハ夕霧の子なり
此れし給　和歌し同亜元なり
いさらへしめまへ　薫の院へ説人の和歌を院へ
あつさと　あつえしつさあさ楓女となり
女乃しまく　思ハうらへみくきてしのことなり

又律と毋しこれハくけつりや
ゆりこし　あつえの事より　信濃の国
ふんしゆつりて
信濃の君して　あるハ　ゆをかけとり
つき高き古りの中くに似るまつるゝ
人しのけとき　きこしは　ゆをかけ
ふてめまつり
管りてさうそれ　寄声　謡引　茶花
下　高き奥しの　ゆくとうたくうり
世君ハ　萱ハりくゝ　和歌　似るまつるゝ　世能
世能のふしくのゆくりけるべし

ゆくさうのめ
盃とのこすゝ世ハ　世能ハ　厳乃ふしの間
うゝ世くあるしの方ハ　ハうゝきりや盃　あるしの能ハ敷仕た
とのこりてやとうり
こゝ世ふさ　統こりくゝくゝ
すり竹の有るすゝ　是ハ世能の能
とつゝめうゝ
ゆれこゝ　ゆ前乃物つえ　世厳ゝ世
世乃ゝ能ゆゝ　ゆゝや又竹川ハ　世ゝ世　世
まゝうのめゝゝ
ゝひ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　ハゝの事を

龍眠猶甚餘人酔顛本心と云心を立る
いつはりてあひおもふ　酒と云所のりと云也
ことはいひとりの辞退といふて
ありける　踏舞の此けの詞に竹川に付く
いろことゝいふ　折ふしの詠ふるハ花ふる秋
すゝめけふかくらしなり
あむすやかく　水澤の踏歌に付く
のすなり梵経のまへなくりしく尺白水
むすやかくとは此ころのこゝろとなりと雲団
ひのふるしをうつしまへいろふなり
まはていぬ　あるゝ人のほとゝもにひく辞

人は皆是りかは　ほのと花は雖もりと
秋の月の此はりしるさもかねの家かへく
おもきこのようなり
ふるみ人の尽し　遠きとなし
はりつゝや気をふらん　梅とほのし雖ぬ
りおかしのあられもあ遠くたちりかれ
あかし外ハしりさしとけなり
竹川のたましい出く　梅と鶯の何し云り
はひのほとゝりもほようなり
ありすけしけてかくて　上詞しみなす
あしきてしいり

まくハかれむまやと　侍従の文乃詞と先和
ゐゝの御こゝろやまさしくてこそりあはれと人
しらぬよしと返事しけりて
竹河と和とうましきに　ゆゝ家のまちやくに
りかれしハなくし出入り令ほもとあめ姫ハ
むと早下ニてかこてふれ
ちゝさゆりまて　侍従の介しゆゝと姫
君しあまよやこそ申けり
れく桜の道ハちりうしくもとり　桜さく桜ニ山
の桜花れく桜あ道ハちるさくてあり
まちかひりつゝとあのましくあり　玉鬘の

家刑の人めま道なれハちらしらくきく
りすく花ともかれすとて
十八九乃打て　姫君兄弟の年比打とこと
とひとこそ　中之乃すすり
浮ら文如く　色のうつらしきすり
むひやられ　あ孫君のそすり
侍従君もたれ　姫君の才すり乃御批判
なふ　すみとはすすなれて
兄君くら　侍従の兄
家従人のいろしら　左近中将　侍従兄　但すり
如くやけの家仕のゝりて人ゑかりくもそ

八位殿より姫君さまの御ものがたりをしたまへ。
弁宮ハまいりて　中将の君より文付し給ふ
文宮なりゆゑこゝろもとめ〳〵なまめかしきを
やハゆゑ殿てんとハ姫君さま〳〵の事
すりあはせこゝろもとあり　とてもやはり
九七八　中将弁殿より　兄君殿へ
ひ御ありはさまと　のなさのこゝろくひめ君さまと文つゝ
すゝ殿ハ殿やとすり
梅と殿ゆゑ　姫君さまのゆゝせてゆゝ

あるゝと中将弁のはくひのこゝろ
こゝろとのさまこゝろより
古殿ハ　此殿なさ月ハ月をいてまてハ
中将乃こゝろなりゝ　ゆゝしや
人の聲より　あるこゝをなり
なりより付てこゝ　冷泉院殿御ゆゝ
行しつけてゝ　ゆゝ殿ゆゝ
ゆゝてゝ
院へさりゝ姫ゝん事ハ此君さまゝ殿ものゝ
えなりゝ　冷泉院へさりゝ
ゝん事とハゝゝゝさゝゝと兄君ゝん

人乃中ゑまよりり

世しそくうしてう　和乃ちうく毒の葉り

むまてを甚世を世とはくらう奥を

うあなを世とうり

いさやうめりやうなさ人乃　む鬱より

ここうり久さりの市一の女青又の女

浄ひさいりあまりの

例の中れ　義人中れうり仏法のりうく手り

ちうり仏陀ハ久市より世て出りり

佛すものあう世ア了んより　佛乃出世て

あうんうハまうくれさうり

桐多れのやめを又世乃ふり　くしふ

あうのうりなり

京しりけん後の　桐多よ衣ハふく深

て仏ん花乃しりけんのしれて世と

ハさうく多しいてうう　あの心毒婦ハ

う桐のうりなりく仏法ふり中ふ何ふ

右ふ殺多ゑ　中居の猪ふ

こまの殺ん　言葉不右ふり殺ふ

猪方ふ乳殺ふ　ハ右ふ世ふて

ちうりをとていの浄ま　よりて仏ふ木法

れりりて　桐の木二年ふ

まいりたる法姫君のたのもしうおぼ
してうちあくるそのあけぼのの
ほしのひかりもうすくなりぬる
何事とはなく悲しう
かすかなるこゑにて　花とひとしほ
みるまもなくやと　えもいはんせう
り後のすゑいとうるはしき人かなの
ものしたまへる
猫の風しらの　風あらくふく吹く
ふきすさびたるあけぼの
しはまほしき方のかたりぬべきをとこ

とはるるに風はやがてのさとくるとて
宰相君　姉君の方へ人をり
りくとはるるにはかりはかりめる　ほの
ゝとあけぬるにはかりしはくをり
風しらぬ事はなし　さてうちとけは不
はるるに我方よりはるるとて
はるるに池のほとり　散てをるまてをて
きはまりあり　ゆいてをれのあるに
はるるの　のあけぬるにはかりの
天竺の風しらぬ　とのあるにはかり方
の袖をさつめて　集てをるはいとあ

[illegible]

の神ハいりてしゆりてしゆりの神を
ちかひ申しうしてゆりてしゆりの神を
[illegible]ありてこゝあり
[illegible]　是より世界の四文の伯
[illegible]ハ寅よ[illegible]　姫君ハ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]　雲井殿の玉鬘乃
[illegible]
[illegible]ハ
[illegible]

いつ[illegible]事ニ　[illegible]の[illegible]事の詞
[illegible]月日ハ　[illegible]
[illegible]ハ[illegible]て　[illegible]
[illegible]や[illegible]
中将[illegible]　姫君の世[illegible]人[illegible]乃文
[illegible]人
[illegible]事[illegible]
の[illegible]の[illegible]人の[illegible]
[illegible]中ぬの[illegible]人[illegible]
[illegible]

作めのきんろせ　是ハかねれ姫君らしと
ひくきをあそれ　　是ハ義人かねの
めしつきうひくき形見ありけ
あそていひ物くさ　是ハ中ねの碁しの
りやすくはめはなんとは中ねとうの
しはくこうの絵をかねのうまつけな
きやうとかゆうとる
きんろく　こうんせ
きこしのさせたくハ　中ねの碁しの組
ひくしのさせぬくしハ義人かねの
姫君同ばくうり

いてやさそ　義人かねの使ありやさを
の出ようこうかりうこうすりまけはくしは
姫君の碁しまひのるすり
ゆひらく　言ふ言へすりつてもゆれく
こうきと　いふこうなり
のくこせをまりハ　目ふをて碁のもをて
いてやすう数すぬ　ゆるよ　いそやすうハうさ
ありすりうう分ひまけしのかをこうの
ワリ碁やつこさしうん　ゆりしも出ようつよ
きこハ院の御事をふくませうり
あそこをゆせ　是又義人かねの

なりけるにてよみ給ふ歌なりけり此歌
氣しゆのせらるゝに三首の歌奉らせらるゝ
ちかく寄らし　久寿の息らしなり
院のさうしの次　久寿の御口まで
聞いまゐらんとは院のゆうしのへ処をあまた
りし思て女房のかりし歌して聞入さりしと
かりくやしきはまへ對面のなくても
御堅ぐりの御をねたくやしきて　先人女房の弁此事とりして
さて例の
生死とて　女房のあはしきにてしとらるて
事のの三ハあり次　こと多れ思ひけりを三美よ

此ハ入るの院さまありしかり
ありてあれて女房のかくさゑく見ゆ始なる中君
とを御らんのゆりひとまかり
目に院の此事の此かりけそてを　めき御此て
そは女房のかくさりなきて見てとはいか
なり一通ゆりてきし人まいそてまかり
此御文ありて　御とり人く美しく
書し文の事なり
々まう三つ云ひとかりなる　思ひの外とも々
此三つしくさて給ひ通へる死なりなるに
いかなり花ハ御ありしの方よりの起きつの

やはらかなりハ坊りとの言葉とを
うるさくなりてきこえ　侍人の女を遣よ
のことにて行方しれず　尼元人のうきをな
とさて つゝりてうるとすり
九月九日　冷泉院
へ服者ばかりなる
あやまつてまりしかを　なぎやうぶの人の
義人かねもすて　雲井かりの文ばかりを
ばかりなるもとは服者の御ばかりもすて
分つゝと　久さりもの文ばかりを　ぶこうこハ
いとすてのすりかりかりの侍人

きすりかりハくるかりのかりとして
源かねもの　久さりのるさしかり
ち御ちの殿　ゐ藤の行方
いり方まけて　むこりハゐ藤もの先
まで院へばかりの服者し　結相先先方
友中御ちハ　鏡屋の鬼を中納ちハ
中ね弁ち者　友中納ちもの方むこ　ハ
例の人　友中将の御をこの事
とハるかりと　かねもの文ばかり
殿の御りのかの　服者ばかりの文のしつ
きるかりすく　ばかりのいてくるを

おもく心方　姫君のはかりくだりし雲井にぞ
かゝり此親しられて　此の何とさるかんとく
気て人常ならぬ世の　その頃し気とうしなれ
ゝ世ハすてあまハいつれの人ありしか払うし
みかへめくさゝかたすり
ゆくへさ方世をくりたんかせてしるべそりたる
とハの頃りさめりて命をもすて書からたる
て世乃常なきさとめりいハさるしすり　ときうへて度よとのへすり
かくいひやまうし
おもかりうてむかさへ　並つりんといひしと存ゆ
ありて御悲そのあまハいひくいれこそとしく

多の名ハとくし　此つなハ云ゝるハとぞ世中乃
常なきを此しいひハなけとくもこいはやみれ何て
こてりて人の名をうつめてしあの命りさハ返
いけの世の云しハ何し　一ことも訊て何とも任ね
死まとやさんとくいかれの人よくろうてあれ
むしきれととも思はぬとの何しくるあり
つゐの心まへて
季札向上国路逢徐君而
約剣帰日尋徐君已死仍乗墓樹挂剣去
ト云ゝ　史記　りしさ紀すりとも云ひなにか事
あはれの何しいひ句をいるなるべし
后母御　秋好中宮之母御ハちしの母く

こゝ人をさして　院の御事なり
さかりのもみぢならんと　かゝりの紅葉へりしにて
此御方また　むかしの姫君の事也
あしたる初ゆくしあらは　御前の事なりあしく
御心のあらはなる事かくハあのよしにて松より
こゝろハ末乃松山のへなり
氣いろをもあらはね　夜居僧の我心しりたまはね
よしと申し見ゆるなり
紫乃家ハつまへと　紫此家ハゆかりの事にて
見すなる我心絹なるとのべたり也
小心の引をつひなきさうしとあるなり

御め形の君　夜居僧なる人なり
さして年経て　花人の御中宮ではへしをねて
院まハ彼君をしるも　久かりの息をしるなり
殿よハ院此殿なり
まかりけりハ　上乃人への御事
白河との　むかしの乃なり
さまハよき世人の心乃をしるも　まへま中納乃
いろめなるし物し合とかさこそなり
いまや　むかしの絶なり
まかりたるなき　禁中此ましらひのかれて
苑をめくへきしより　ちからあるまハよくなしける

[illegible]のむしろ　中将乃御方

[illegible]やとうの松てゆ[illegible]

内さいくハうこうこうてをうてハすもの

おうてうてゆ[illegible]庭[illegible]のおと

ゆりうえんとハれ旦那とのつしおとうり

女房ハいさくゆ[illegible]　院の女房ハ西殿の[illegible]

なをハ女の[illegible]をあ〳〵人間[illegible]

若しゆ[illegible]てゆるハ[illegible]りけさ[illegible]のを

[illegible]ゆしゆをのおとをぬしゆ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]りけさしハとの女房と院[illegible]

[illegible]の事〳〵

七月[illegible]りハ　女房懐妊のう

いてう〳〵[illegible]人人とけのめ〳〵月間ゆてハ

人のう[illegible]をそ[illegible]いそきけんとうり

[illegible]をけ[illegible]　[illegible]

[illegible]の姫君[illegible]方ひとあり

[illegible]ハ今たり　[illegible]人女房のさいせ一人

[illegible]

[illegible]ハ

[illegible]十[illegible]

月十[illegible]日の事うり十七八のうちなり

[illegible]ハ[illegible]

[illegible]

右の方はしゐは八右近中将なりしなり
おもてに十二月の秋なと中わし物任ぜられ
御前より　内よりの
供院とハ　岭出院ねのよるひるく御りまいく
りまいれ　暗言ハ　の巻ハ綿なり
ゆきとも　うちとけ
ゆきとも　かねのうりなり　十年
ゆきとも　ゆきとれり
四月廿日の秋ハ事なり
右衣の　秋ハ中ゆきハ御方にて院を御
所へまいりなり
盃をとりてひとりとのゝ　めりのくとハ

美人おわりのゝ酒とゝのゝくすゝをゝ
て　ゆうしゐとうりゆうしゐ人のぶり
うきあり　ひけありくく　ゆきあり
うゆうゝハ　岭出院乃御祖なり　この方ハ様樂ハ仏
なりうゝ　うくゝ人とハうゝ　ひうゝ人のゝ
うゆうゆきゝとゝ　ゝとゝ　ゝとゝ
美人おわの月ひとりしかやうりをうりの
ひゝうゝ　あんや　此おわをうゝ人
なりうゝ　ゝのひゝ　ゝはあ
ゝやゝハうゝ男はあんやゝ
ゝのゝ　ゝハ院中のうゝ

さより一乗の月のひかりもてらしてかかる乃
こしちて猶乃ひしとつしらせあり也ハ
かねの書誓の非君の凡婦に恥ちかへし
やこハあやしきと見しちて　是乃歌ハやこハ
なほなつし是ハ内の女房の詞にすつしてと
ハかめ乃御しらへなり月よハ一きハなりと
のうくわけり
竹川の巻の歌乃事ハ　是ハ去年正月あるし
歌のうたとはなり
いかなる事あれと　御ものへて相手かくちとハ
かく思ひやちかけさなりし涙の露かとん

なく也て此よのめ哀れ　ちくへてく猶まりて邪しとて
六条院のとかく此あしらし女宮よりてあらひをとれから
院の御詞てなり様まての踏歌の後宴あ
女楽をとらへしとて楽器すし　是出さまて
よし凡内侶其時ハめつらしまて母く女御ほ
ての宴あと記られりしとあらハせり
紫上の女に紫院ハ御かなり
浮舟　亦ハてひ物れ　曲ハ　楽曲て
一首のうた此歌
いつかりせんこうれし　双紙此詞てハるんもの
ひりくりと浮舟の外しを申し出給へ
しかのよしと申しめさやかに心わかり

平月に　七月より任官する人
の中ね者　九位中将すけさねとこ
のうえの方にくらいはべり
かくいひて　世中とうくいひてたてまつれば
やうりんうんん
この御ぶみ　冷泉院の御ぶみ
ゆゆしやきりうぬうたまふ
内侍宣旨　とも
よろしいうくゆゆしう言ふ事を
稱ぜんしうたまふ　さもあるべきなり
右衛門の御ぶみ　殿上人の
とうつさのひすけとうるはく内侍宣とも

ゆつりおとし　又今しのひきたまふとも
中者と内侍宣に　ひ　ゆるすしや
昔は例す　又乃殿とうるゆつると例とは
し内侍宣ひうきうへうん
此者乃　中文の内侍宣ひうるはくさはせて
うに母者は稱しはうのみとうりてんと
母御方　雲井乃うの
弁者にて　むつの御ぶみ
うの御ぶみ　夕者は
ゆゆしやけ事し　こ役すの事とを
こうきうんはあるべきとうり

又いさのハ　姫君院（さりなくしハ女御とちく
りゝとハ中ゝとちくりなく又中ゝ中
せまうゝ君ゝ君ゝ
ちゝいさんより　院の御門ハ方之つ九とは姫君
はえのをくゝあさいとハちくるゝとゝ
ゝゝとしゝより　むこゝのかゝらゝとは三りなく
孫ハひめ君ハ子ゝ月なゝ
ゝゝめゝき　御位とゝりゆちゝまゝゝ
昇ゝの御ゝゝゝ
ゝゝあゝて　御息所八服ゝ御子如来なく
ゝゝゝゝゝの事ゝゝし

ゝゝゝハまゝて　院乃御門ゝ出ゝ事ゝ
女御を　ゝゝの女ゝ
ゝゝゝゝゝ　むこゝのゝゝ
三条中将ひく　白ゝゝゝゝゝゝゝゝ
三条中将ゝゝゝ中ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ　高ゝゝゝゝゝゝ院のゝゝゝゝ
世中将ハ　三位乃中ゝゝゝゝゝ
ゝゝ長ゝ女御と　竹河のゝゝ大ゝゝゝ義ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

今日より北面と申す所へ行ぐるなり
いとゆかしきやうなれば　双紙の袋へ入れて
〈きさり〉と行くに〈八〉こんきりにて〈ハ〉
らんの若ハ　とゝの内侍殿へ参りて
左大臣殿せられて　竹川左大臣殿へ
右ハ左大臣　久寿元年正月
反大納言　桜家大納言殿へ右大臣殿へ参りて
参まいりて　右大臣殿へ
ゆの中将ハ中納言殿　ゆの中将殿ハ二条殿へ参りて
雅女殿ハ中納言殿へ　任せられ名此殿
任じ申さく白文の書ハ四巻五巻なり

右衛門督殿ハ此次の年に美乃守なり
三位殿ハ宰相ハ上りて　美人サわりて
御前に庭にて
さりて親ハ　ゆの宮殿に家へ
あるとあるの事ハ　礼とて　ゆの宮殿ハ
のべ　のべ　のべ　のべ
むしの　源氏の御事
ゆの宮殿ハ　白川
道の白川人　ゆの宮殿ハ　昇殿
けなりあり
ゆの宮殿ハ　ゆの宮殿

姫ははゝ一つの親とむつのかゝと申き
御むすめのきさきハ承香殿の御かたと
申まうしてのかみとハいふなり
あいのんすくてさんのよくとしき　人とて
すこハ中の上へき事なり給ことなり
一　ときハ院ハきてゐつれは　ときハ院よ申し給
女つゝハ　御息所とハいはれとさなるゝ
しうりを　冷泉院の御事なり
御息所を　此里より后御子
宮治の姫君は　八条の姫君と申しし
推古の昔の中川にあらまほしなり

ちかくを見ましゝハ　しけゝとむつましくて見えましゝ
けしきなりむつましきかたのゆかりなり
大臣殿ハさく此殿のひとりなり　大殿ハ左府
大臣の殿なり堀河の殿乃東にあそ
也り右大臣は大将如をたまてしてを人
あまた集り給とちかくさて聞給なり
冬ゝ之よれ大臣殿のめのとの　白家なり
父ゆりの姪子すまひのこりあるしまてよ
いそ給ひしと例そして右藤のやとにをゝ
と語しまへ九出給すゑのりとのそのを
やのまつれみゝをまひのおハ物語よのと見へ

かーつきぬ　　和歌の浦女のうた

ゆくへ　　和歌うら小方ハまれなるゆゑ

たゝぬ世ぬひて　　業平ゆゑ　世ゆゑ

和歌の浦うり

ちぎりなの世やいりあはつ　是ハひけ

ろのさくらのさいかり　姫君さへ院の

ゆえいりたつゆやうにて　宴行ぬ

ハひ桂殿の君ハ母君ハ任なれ　後嵯

の家ゆゑ　ひくくして

ゆくへのひろ事ハよろぬるたり

うゝもとゑの　ひけ方ひくゝ若ゑの

事ゆりいたゝ　ゝくきのなりて

たち長殿の宰相中将を　久きりのみ義人

ゆくゑ　宰相乃を業うり

ゆくゝや家ゆ

ゆくゝ七八のり　業ゆゆ

みくりゝゆゆ君さゝ乃　むくりのい宰相うの

ぬゑ　ゆくゝ見てのゆくゝ

石殿ゆゝ殿　殿業の中せまゝハみゝを

うやゝぬゑうゝひゝやゝゑまゝとゝ

右ゑ信殿　むくりゝのゆ先方りありハ

ゑ信殿中ハ右ち弁うり

北条氏康 花 八度にあつまりたり 大政官政
務ふのありさまなれば此条條にはあり
ぬ所にとゝめめしかの此以中ぬ花ぬめり
年のまゝにあり今てハ官位のくまものね
とゝ人々なりさまとゝ人よとるゝ歌ぬ
宰相ぬこゝろつきしくく 北条氏康
ゝりとゝはさしこゝろくはてのぬなり

第二紅梅

巻名ぬ沼なりて是ぬ中納言殿
あり雅なまこゝろ所八月二巻にて秋の除
目し中納言に任すゝ月ぬ花八巻ぬ事
なれハあり年九三巻の巻のすなりへし
白ゝぬまて八十四歳ぬ十九巻ぬ秋まての
ゝ月ぬいまて八月三の巻のすなりて
四巻巻なりへし 竹川八十四より廿二巻中納
言に任すまてのすゝのをゝりいまハ
竹川の巻にぬ花ぬ 右大臣に任て
大饗ゆこゝろまゝりのしのすなりへし

やうの事にもいはまくてハ大納言とのとい
つけ給へりかくて竹川には任せり
そのよのあそんの大納言と　紅梅乃おとゝへ
其わたりへも竹川の巣をより前の比あひし
思やらしく　高きに而しきりしなり
少将なり　こしめすの少将ハ誰もなり
後の物かたられけるは　鬚黒乃子なり
兵部卿宮　紫上の父なり
右大将卿　薫事なり世継よりも見る紅書
之此巻の間十七八年なり其中にあまたの
人をも経たりくしたるの事にて候

御子を世給ふ　蛍兵部卿も失給ひてのち紅梅の
北のかたとなりたまへるなり
古宮乃御方に　槙柱君の腹に蛍兵部卿の御
女一人　紅梅乃御方といふ白宮の女なりけり
こまよなりけるの男一人同腹なり
その御方乃　あまたの御子たちのいとこ
くの人々ハよるねすることはしれ出なり
南殿して小　みな中君といふ先腹なり
紅梅乃北の方の嫡女なり先腹へ
先には女の御方　蛍宮の御女へ
うれしそのは宝物　継父鬚黒又蛍

文の言すべきのたまうもとなり

中宮　明石中宮

左大臣の母御　久しきりにすすり久敷名

梅壺の時任れる竹河はまの御しるし先

りくさ　左大納言なる梅ちるひはおもしろ

かりし世壺中納言なりしみも世をも

竹川まの同世なり紙と久しきりとなりと

八時任とあるべし　なる梅ちるとは大納言なる

はの八大納言なるはあり白文なるの

御言とはあるのはのまうりいひ付

給うもやとこそ　竹川まをよりくはと又時

任の御とはいはるるのとはいはゆるあるとこそ

十七八の　うるはしきの婿君なり

うるはしすとはすべしとはすべなり

無部卿宮　白文

この文の若　弘徽殿の息

四ゝ三位なり　白文の後なり

美日の弁此御ゝなり　源氏のゝ弁なり

三位のすはしは茅上はゝ

美日大弁の御ゝ　後朱雀院

の御宇長暦三年閏三日弁官

大弁宮云度ゝ宣旨不諸ゝ依那藤

氏宮を始まり侍足内方殿 教通公 一女 丁入
内裏へ宣下ありて其年十二月内方殿女 貞子
入内為女御 と業長暦の新八幡宮以
後の事なり然ハ八幡宮のとりあつかひ
しる度ゝ及て侍らんのうあるにや
内裏へさしもすく 母のべにはまとまる
ひめ君ハまことんといつり
殿ハつまゝ〻なりなりにうく 大君母君ゝ
て内へさしりあへハ殿ハ内をつれ〻なりと
りやゝ行ゝの八の内へすゝや
く内へしりや こゝもいのうゝ

さゝめへゝんのさ 五藤の内ゝ八組りゝ
の君とれ云ようやゝ母ゝ内へ
侍すゝ世し侍て まゝ内の殿ハ八郎ぬ河ゝ
ゝまゝ侍ゝ
いつまゝ五藤八ゝ
なりまゝ八ゝ
八角のくきれなりやゝ侍ゝ 枇杷八方八ゝて
源中納言 業平納言 竹の事ゝ
行ゝりハ 久ゝ
い侍琴ゝ ひゝ
ゝて侍ゝ

ゆゝしくすぐれたる事なり

世乃浦にあく　　枇杷ハ母の三ツまで似あ

ゝあはれなれとこの花ハ中ゝ

はゝしやとゝ　　中ゝ

ワさとうゝ　　ゝ　　殿と重ね

来年の時節の角ハ色と丸ハとして殿

ゆゝしくハ亜夜と云ハ花ハ

ゆつりはゝてうゝ　　ゆゝしく成ぬ

ゆゝしくハ成ぬ　　ゆゝしくハ

京へのぼりつゝ　　ゆゝしくハ

をさゝゝぬゝ　　ゆゝしくハ

うゝ　　ゝゝ祈ゝや　　今ハ

うゝ　　ハ晴ゝ

三ゝ　　ゝ　　梅の花

ゆゝ　　ゆゝ

ゝ　　ゝ

いゝ　　ゝ

ゝ　　ゝ

あゝ　　ゝ　　大論云釈迦仏入涅

槃ゝ後阿難多高座結集諸経ゝ時

其形山佛仏形舎疑佛再忘給

ひゝりのありけゝ　　羅漢ゝ者ゝ事ゝ

ふあつて風乃白かん　まり営れは紛先あ
縁有り風の白かんとハ公のもちとかのめり
をそうしけり
かくろう事ませ　口きもの文乃やうしたな
しゐもんかしあるとハうをやうすしけり
うかまと三きんのさめしもりけり
中宮の　時名中宮此之院より参内まての
御殿并所へ出されまりなり
らすてゝやもと乳所　二条院乃事なり
此より進てりん人とあかんめり　まいけいてんき
以り給て後ハいさよみぬ給　此そて進及

御しいき墨着てのさまかりり人まるかき八
人めまろかきなり
御まへ本りけ　白衣此御まへ有りハ後
らひよしとやなり
殊とは人けなりと　鬼ろ事進としなり
かくめしきあれしとらかく　右めしきとハ
白衣乃昇下有りあれしすうとは薫衣
とる御事之旧ゆりけるなり
ふ乃て此後をまし候ハ　引る来見る
見てくの後さ人のといまハ不叶欲之心
八大納言の方より文とさいて世て進さるゝ

[illegible]せて後のとり出な
らまりつハいつしかれまりしと
多ふられて　その[illegible]の多しそれて[illegible]花
つゝとしてあるハりけり　い花ハ多しの
をりすゝくさるしすり
いもの[illegible]ハ　その[illegible]方の事すり葉の
多いしいあ物ハ[illegible]ハくの[illegible]
[illegible]ん人よ　[illegible]の[illegible]すりそん
そ[illegible]ゆゝのさうくゝかりくゝかりそん人よ
しハ[illegible]の事の[illegible]
[illegible]

大納言乃[illegible]ハ　[illegible]方[illegible]ハ中[illegible]
[illegible]
[illegible]乃[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]よ　[illegible]
[illegible]の事すり
[illegible]
[illegible]
[illegible]
中[illegible]方の[illegible]ハ　[illegible]
[illegible]
事[illegible]

[illegible]つの事[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

さて御りんきしてのおくの事あり
右納言ハ白文の御方にて被
仰ことをうけおはしまいて申
さんすり宮きとりうは白文乃御
けきとれハまことにおもしろ
御こりをもて　東の御方ハ御色とも
ふるうおもてなすりさて白文のまけ
しとさんすり
ゆひさきとく　白文の事すり
八文の姫君とも　宮ばの文の姫君の
事すり三いうせの事ハ人をしけり

まさてはしハ指姫りハ一度とかく
さ五ハ元雅せと月けの事なりしし
白のやうしハ地なりさえあるとハ　ひうしう乃
御べりうしけりさちりけとハ母君
さまりうの御色すしうあるなり